「いのち」について⑥

おやさと研究所教授
堀内　みどり　*Midori Horiuchi*

生きている私は自分の死を体験することはありません。また、自分の誕生についての記憶を持ち続けているということも稀なことです。

生と死。生まれてきたこと、生きていること、死があること。

繰り返されてきたこの営みについて、人々は考え、説き、伝えてきました。生まれた人には死が訪れます。永生を求めた人もやがて死んでいきました。宗教はそうした人々の生と死について“意味”を与えてきました。生と再生あるいは輪廻、来世や来生、最後の審判等々。これらは、換言すれば、現生の人々に生き方を示し、人々に救いを提供してきました。

チベットの死者の書

チベットでは、肉体を失った意識は外界の刺激から離れることによって穏やかになり、そのとき、もっとも根源的なものに触れることができると信じられています。チベット人にとって死は「解脱」するチャンスでもあるため、死について積極的に語られ、命の最期には僧侶を呼んで死出の準備をし、死を受け入れます。

「チベットの死者の書」は「バルドゥ・トェ・ドル・チェンモ（中有において聴聞することによる解脱）」（あるいは「バルドゥ・トェ・ドル」）のことで、チベットで僧侶が死にゆく人の枕元で唱えます。死者の魂が迷いの世界に再び輪廻しないよう、死後の魂の救済を具体化した経典であると信じられています。（複数の「バルドゥ・トェ・ドル」が伝えられているが、そのうちの一つが、1918年にインド（マドラス）に渡ったイギリスの人類学者エヴァンス・ヴェンツによって英訳され、1927年に出版、1938年のドイツ語版に心理学者のC・G・ユングが心理学的解説を付けたことから世界的に注目を集めたといわれる。）

この経典は、死に逝く病人に対して僧侶が読経するだけでなく、死後も死者の魂が迷いの世界に再び輪廻しないよう、49日間にわたって唱えられ、解脱の道を差し示します。

仏教では、死んで次の生を受けるまでに中有（ちゅうう）という状態を通ると説かれます。この中有はチベット語でバルドゥと言い、「チベットの死者の書」では、それはさらに３段階に分かれています。チカエ･バルドゥ（死の瞬間のバルドゥ）、チョエニ・バルドゥ（存在本来＜心の本体＞の姿のバルドゥ）、シパ・バルドゥ（再生へ向かう迷いの状態のバルドゥ）です。

これら３つのバルドゥのどこかで解脱できれば、仏の世界へ行けると考えられています。たとえば、死の直後には眩いばかりの光を見ることができます。その光についていけば救いが得られるのですが、執着があるとついていけません。そこで、第２のバルドゥにおける導きが必要となってきます。

> ああ、善い人（善男子）○○よ、今こそ、汝が道を求める時が到来した。汝の呼吸が途絶えんとするや否や、汝には第一のバルドゥの＜根源の光明＞というものが現れるであろう。外への息が途絶えると、虚空のように赫々として空である存在本来のすがた（法性）が現れるであろう。…この時に、汝自身でこれの本体を覚るべきである。そしてその覚った状態に留まるべきである。３日～３日半続く。（川崎信定訳、ちくま学芸文庫版、1993年、19～20頁）
>
> ああ、善い人よ、今や（私は死んだ）という、例のあのものがやってきたのだ。この世から外へ行くのは汝ひとりではないのだ。死は誰にでも起こることである。この世の生に執着や希求を起こしてはならない。執着や希求を起こしたとしても、この世に留まることは不可能である。汝は輪廻し彷徨いつづけるよりほかはないのだ。執着してはならない。貪り求めてはならない。三宝を思いつづけるべきである。（同書、32頁）

エジプトの死者の書

「死者の書」と呼ばれるものは古代エジプトにもありました。古代エジプトでは、死後の生命が信じられていたとされます。死後の世界は、死者の社会的地位によって異なるようですが、誰もが死後の生活に必要な道具を用意しました。古王朝（紀元前2750～2213年）の時代には、死後の世界で安楽な生活ができたのは王や王族に限られていたようです。新王朝（紀元前1539～1070年）の時代に入って巻物（パピルス）に呪文が描かれるようになり、これが「死者の書」として知られるようになったということです。死後に出会うと予想されるさまざまな障害や審判を乗り越えて、無事楽園に到達するために描かれたとされる呪文の数々です。（矢島文夫『カラー版死者の書』社会思想社、1986年、107～164頁参照。）

エジプトの墓といえば、ミイラのことがすぐに想起されます。ミイラは、肉体の腐敗を防ぎ、生前の死者と同じ姿を保たせるものでした。ミイラが破損した場合に備え、魂を維持するための呪文が用意されていたということです。

また、遺体や像にはその人の名前が記され、そのことによって、死者の親類縁者がその名前を忘れることがあっても、死者自身は名前とともに永遠に存続すると考えられていたようです。これは葬送儀礼の一部でした。

古代エジプトでは、人間は３つの要素によって構成されていると考えられました。死後肉体から分離して自由となり、霊界を行き来する力を得た「カ」（生命体、両手を挙げた人の姿、あるいは高く掲げた２本の腕として表現）は、墓の中の肉体に依存し、捧げられた供物を取りに肉体に戻り、その力を維持するとされました。「バ」（魂、人の頭を持った鳥の姿）は、肉体を離れ墓の外へ出て行き、死者が生前過ごした楽しい場所を訪れることができると考えられていました。そして、死後の人々をたすける超自然の力「アク」が考えられました。死後の生命の継続は、葬送儀礼の正しい執行や必要な副葬品に依拠していたので、遺された生者の役割は相当なものであったでしょう。

「エジプトの死者の書」は、“心臓を秤ではかる章”が知られていて、真理の女神マアトの羽根（真実の羽根）と死者の心臓がそれぞれ秤に乗り、魂が罪で重いと傾くようになっていて、死者が真実を語れば楽園へ、嘘であれば魂を食す幻獣に喰われ二度と転生できなくなる、と考えられました。

これら二つの書は、その死生観は異なっているように見えますが、死が単なる終わりではないこと、死と生あるいは死者と生者とが死後も関わり続けていることを物語っているようです。